

令和4年度 学校評価総括表

十津川村立十津川中学校

学校教育目標		ふるさと十津川を愛し、ふるさとでの学びを活かして、新しい時代を築く、心豊かな生徒の育成				総合評価 (A~D)	B		
目指す生徒像		自主一自ら進んで学び、考えて行動できる生徒(確かな学力) 協働一勤労と責任を重んじ、礼儀正しく協力できる生徒(豊かな人間性) 剛健一自他の生命を尊重し、明るく元気でたくましく心身を鍛える生徒(健やかな体)							
令和3年度の成果と課題		本年度の重点目標				具 体 的 方 策			
適切な感染症対策を心掛け、生徒の安心・安全に努めた。又、新学習指導要領の完全実施と評価の充実、ICT教育の推進、生徒会活動の活性化等に注力し、学校教育の充実に繋がった。学習意欲と学力の向上・家庭学習の充実に向け、生徒・保護者への働きかけをより積極的に行う必要がある。		基礎、基本の定着を図り、学習習慣の確立を目指す。		生徒の実態を把握し、学習が遅れがちな生徒への対策を図り、実態に応じた指導を行う。					
		生徒の、主体的な活動を重視し、積極的に行動できる生徒を育成する。		生徒会活動が、より自発的・自治的な活動になるよう、全教員で支援する。					
		郷土を愛し、未来を担う生徒を育成する。		郷土学習を教育活動に位置付け、生徒が自尊感情を高め、自己実現を目指す活動となるようにする。					
		自己の将来に対する目的意識を育成する。		勤労の尊さを理解させるとともに、自らの力で進路を選択していく生徒を育成する。					
		心のふれあいを大切にし、人権意識の向上を目指す。		道徳の時間を中心として、全教育活動を通して人権意識を高め、人権を尊重する実践力をもたせる。					
		生徒が、心身ともに健康な学校生活を送れるようにする。		食に関する教育の充実を図るとともに、生徒が「健康」について意識を高めることをめざす。					
		保護者や地域、村内各校所、関係諸機関との連携をより深める。		家庭や地域社会との関わりを多くもつとともに、職場体験、小中連絡会、中高連携活動を充実させる。					
評価項目	具体的目標 評価小項目	具体的方策	評価指標	中間期(9月)		年度末(2月)		学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策	
				自己評価 (A~D)	進捗状況	自己評価結果 (A~D)	成果と課題(評価結果の分析)		改善方策等
学習指導	国語	小テストを実施し、こまめに復習する機会を設ける。	学習を習慣化し、日々の学習を積み重ねていく態度を養う。	B	1、2年生では、週に1回漢字テストを実施することができた。宿題としてこまめに課題を出すことで、定期テストの前につまみ課題をする生徒が少なくなっている。少数ではあるが、課題をしてこない生徒もいるので、個別に声かけを続ける。	B	小テストや課題テストを実施し、こまめに授業の内容を復習することができた。半数以上の生徒は、小テストに向けて、自主的に課題に取り組み力をつけている。	漢字については、来年度も引き続き週に1回小テストを実施し、基礎の定着を図る。夏休み、冬休みに文法や慣用句、故事成語などを覚えられるように計画を立てる。	○学習指導 ・各教科毎に小テスト等で学習の定着を図る手立てをしている。基礎学力の定着には日々の積み重ねが大切である。 ・授業中の端末使用ルール設定は重要である。将来を考えると端末の使い方を学ぶのは大切なことであるが、安易な端末利用は学習効果を高めるどころか、阻害する恐れもある「諸刃の剣」でもある。保護者にも徹底して周知し、家庭学習を習慣化してほしい。 ・新体力テストの結果が、県や全国平均に劣っている。全校マラソン等を継続的に実施するなど、学校全体で基礎体力の向上に努めてほしい。 ・端末の有効活用は現代教育の必要事項であるが、ノートに鉛筆で書くという基本的なことを疎かにすると、基礎知識の定着には結びつきにくい。それぞれの長所を活かした指導をお願いしたい。 ・コロナ禍を通じ、学校に登校し先生や生徒と顔つきあわせ授業することの大切さを学んだのではないだろうか。小規模校らしく、生徒一人一人の特徴にあった指導を今後も追求してほしい。 ○研究研修 ・家庭学習の定着は保護者の責務であり、それが先決である。 ○生徒指導 ・生徒一人一人を大切にしたい積極的な生徒指導を心掛けている。 ○特別活動等 ・ベルマーク活動等は、自分たちが世の中に貢献しているという自己充実感・自己肯定感につながるので、意欲的に取り組ませてほしい。
	社会	ICTの積極的な活用により授業展開の活性化を図る。	学習用デジタル教科書実証事業を利用して授業におけるICT利用の幅を広げる。	B	デジタル教科書・地図帳を利用して、統計資料・地図の提示が視覚的に短時間で共有理解できるようになってきた。	B	統計資料・地図の提示が視覚的に短時間で共有理解できるようになっただけでなく、他の地図関連アプリと連動したり、公共の統計データと比較することにより教科書の内容をさらに拡大して活用し理解を深める事ができるようになったが、生徒の端末使用状況を授業しながら把握することが困難なため、端末の使用は必要最低限にとどめる紙の教科書と併用している。	授業での端末使用のルールを設け、厳格に適用すること、端末使用状況を確認できる方法を確立して、生徒が授業に専念できる環境を作ることが必要。	
	数学	できる限りわかりやすい授業を行い、数学に対する苦手意識を少しでも軽減させる。	生徒一人一人が積極的に参加して理解を深められる授業を研究・推進する。	B	1授業でなるべく多くの発問をし、全員が参加している状況を作ることができた。小学校の既習内容とも繋げ、深い理解を目指しているが、苦手意識が残る生徒は未だ一定数いる。	B	授業での発問に対する答えの質があがってきている。一人一人の理解が深まり、既習事項と結びつきが強くなっている。一定数の生徒に基礎学力の定着に課題を感じる場面もある。	既習事項との関連を図るために、基礎学力の定着があげられる。復習の時間を設けることや、一人でも取り組める課題を配布することにより基礎学力を向上させていく。	
	理科	年間64回の小テストを活用することで、知識の定着を図る。実験の結果や条件を予想することで、実験の技能・知識を獲得し、思考力を高める。	自然の事象や現象について、理科の知識を活用して文章で論理的に説明する。	B	2回に1回は小テストを実施することで、知識の定着、授業の復習を図ることができた。身近な自然現象と理科の学習を結び付けるために、専門用語を使った文章表現に取り組んでいる。	B	小テストを実施することで、学習内容の定着を確認することができている。ICTの活用により、当たり前の自然現象を言葉で説明するために、理科の重要語句を活用する頻度が上がっている。	年間64回の小テストを単元範囲のテストに変更することで、定期テスト対策につなげる。文章表現力の向上のために、使用語句の限定、字数制限などを設ける。	
	音楽	自身の演奏や耳にした音楽についてどう感じたかを考え、工夫していくための思考力を高める。	得た知識や技能を応用し、どうしたら自身の演奏がより良いものになるか、耳にした音楽の美しさを具体的に文章で他者に伝えられるよう単元をまたいでくり返し記述させる。	B	全体として合唱への取り組み、鑑賞教材の充実により耳にした音楽の美しさや面白さを具体的に記述できる力がついてきた。ここから更に自身の演奏を高めるための思考力を養えるように取り組んでいきたい。	B	耳にした音楽の美しさや面白さを具体的に記述できる力がついてきている。また、ICT機器の活用により、他者の意見を参考にしながら自身の演奏をよりよくするための工夫や改善策を具体的に記述する力が身につけ始めている。	実技力の向上に際し、効果的な方法を考えることはできてきたが、実践するとうまくいかない生徒もいる。適切な助言をしていけるように工夫して授業を展開していく。	
	美術	できる限り多くの作品例や視覚的資料を提示し、それらから感じ取れる美や創意工夫を自分の表現に活用する。	各自が造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができる。	B	各自の課題や作業に対しての参考になるように卒業生の作品や資料集・Webや動画・事前に制作を進めておいた教師自身の作品などを適材適所提示することにより、より意欲と工夫することができるよう進めている。	B	多様な作品例やアーカイブ(保存作品)を生徒に発信することで、柔軟な考えをもって課題制作に取り組むことができていた姿を見ることができた。同時に制作に前向きに取り組む態度の個人差も見られた。	すべての生徒が前向きに制作に取り組むことができるよう課題設定や手順の説明をより個別に合うように検討し、進め方を工夫していく。	
	技術	基本的な技術の知識を学習した上で、その知識を活用することのできる実習を提供して知識の定着と達成感を味わい意欲を高める。	人間の営みの中で発展してきた技術について理解し、自分自身の生活をより良くしようとする態度を身につける。	B	副教材を中心とした知識を学ぶ場面と実習で実際にものづくりやPCでのプログラミング学習などを毎時間行うことで興味関心が高まるように努めている。	B	各学年に応じた実習課題に多くが意欲的に取り組む姿が見られた。プログラミング実習にも意欲的に取り組めたが、内容の更なる検討を要する。	これまでのホームページ作成のプログラミング教材から少し違った内容でプログラミングを学べる教材をインターネットや書籍等から見つけて学習に取り入れる。	
	家庭	各分野において可能な限りの実習を実施し、技能を定着させる。	衣生活・住生活・食生活を自身の問題として考え、家庭で実践する態度を養う。	B	食生活分野では、栄養教諭と協働してバランスのよい食生活について考え、家庭で実践する取り組みを実施した。衣生活分野では身近な裁縫技術の実技指導を行い、技能の向上に繋げることができた。保育分野での実習をこちらで考えていきたい。	B	食生活分野では、栄養教諭を活用し、バランスの良い食生活について深く考える授業を行うことができた。衣生活分野では多くの実習を行ったことで実技力が向上した。	家族・家庭生活及び消費生活において満足な授業展開が成されていない。研修や教科研究会を活用し、授業改善に努める。	
	保健体育	運動時間を確保し、体力の向上を図る。生徒の運動能力に応じた試行錯誤の場を設定し、運動の技能や課題解決のための思考力を高める。	自分自身の能力に応じた運動への取り組み方を身につけ、基礎的な技能を身につけている。	B	個々の運動能力に合わせた段階的な目標の設定や、ドリル学習やタスク(課題)ゲームなど様々な運動の取り組み方を実践することで、飽きずに運動時間を確保できるように努めている。今後は生徒が思考する場を多く設けていきたい。	B	目的を明確にしてドリル学習を行うことで基礎的な技能の向上が見られ、段階的な目標設定を行うことで意欲の向上が見られた。また、自分や上級生の動きを動画で見ようとして努めている。今後は生徒が目標を統一することができた。	新体力テストの結果から、県及び全国平均を下回る項目が男女ともに目立つ結果となっているため、体育授業での体力作りと体育委員会での活動を合わせて、取り組みを充実させていきたい。	
	英語	基礎基本の定着のために単語テストや単元ごとの文法テストを実施し、理解度を確認する。授業内で書く活動や話す活動を積極的に取り入れる。	英語能力の基礎基本の定着を図り、英語を使って表現する力を身につける。	B	授業内で単語テストや文法テストを行い、生徒の理解度を確認することに努めている。英語を使用し表現する力は未熟であるため、生徒にとって身近な場面を設定し学習を進めていきたい。	B	単語テストや文法テストを活用し理解度を確認することはできた。また、英語を使用し表現する力はまだまだ未熟であるが、授業内で生徒にとって身近な場面設定を行うことで、英語の授業以外のところで英語ではなしかけてくる生徒が増えた。	ワークシートを上手く活用し、書くことを通じて表現力を高めたり、友だちとの会話、先生との会話(特にALTとの会話)を活用し、英語を使用する場面を増やしていきたい。	

研究研修	生徒の主体的な学びを育てる授業の創造	基礎基本の定着、家庭学習の充実を目指す。そのために、学習方法の参考になる情報を通信で発行する。朝の学習時間に、各教科の先生方からeライブラリを活用した学習課題を提示する。	日々の宿題、提出物の取り組み状況を確認する。eライブラリの取り組み実績を随時確認する。	B	毎朝の朝学習では、5教科を中心にeライブラリの取り組みを継続している。学習通信については、1学期は基本的な学習方法、2学期は学習習慣を中心に発行している。提出物については、教員間で情報共有を行っている。	B	eライブラリについては、1年間継続した学習を実施できた。授業の進捗に合わせた復習を毎週くり返すことで、プライベートと学校生活の区切りを付ける時間とすることができた。	来年度はメキットの導入を検討する。家庭学習の定着には、学校外で学習を支援していただける体制の構築が必要になっていく。オンラインやアプリでの学習支援を積極的に導入する検討をする。	○キャリア教育・進路指導 ・2年生は数力所の施設や機関・事業所で職場体験が実施できた。来年度も協力を要請し実施してほしい。 ○教育相談 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと綿密に連携し、生徒のより良い支援に繋げている。継続と更なる深化充実を図ってほしい。 ○道徳教育 ・この1年、全職員で研修・研究に取り組んだと聞いている。自己評価もAであり、令和5年度の県発表開催校として、自信を持って取り組んでほしい。 ○人権教育 ・教師による人権講話は当然であるが、地域の方の人権講話にまで広げることが大切である。卒業生等を講師に招聘し、郷土の先輩から学んでもらいたい。 ○特別支援教育 ・来年度は通級指導教室も開室される。一人一人を大切に、個人にあった指導を全校体制で行っていることが評価できる。 ○安全教育 ・「健康安全カード」の提出と確認をされている。生徒の自己管理に教職員全体で取り組んでいることは評価できる。 ○家庭・地域社会・他校種・関係機関との連携 ・学校便り、学級通信、ホームページ等の内容を充実させている。保護者の学校評価をオンラインで行うのも、今の時代には必要だと思う。ただ、一堂に会して「保護者の声」を聞くことも年に数回あっても良いと思う。 ○第1学年 ・他者との関わりを改めてより良い人間関係を気づいてもらいたい。時間厳守は大切な人生のルールの一つなので、徹底して指導してほしい。 ○第2学年 ・職場体験学習や進路学習が、きっと活かせる最高学年になるよう、来年度に期待する。 ○第3学年 ・自他の個性を理解し、行動しようとする姿勢が見えてきたとある。高校生として、さらなる成長を期待する。 ○学校教育の維持・向上 ・先生方のワークライフバランスを大切に、学校教育の充実に努めてほしい。
生徒指導	積極的な生徒指導の推進	安全で安心できる学校を目指し、登下校の立哨や指導、こころといじめのアンケートを実施する。	いじめアンケートをもとに、早期発見、未然防止に努める。週に1回生徒指導部会を設け、職員全員で情報共有し指導にあたる。	B	いじめ、ヤングケアラーのアンケートを実施した。アンケート後には、全校生徒が担任との二者懇談を行い、一人一人と話す時間を設けた。その中で気になることは、生徒指導部会でまとめ、職員全員で情報共有した。	B	アンケートの実施や情報共有を行い、いじめの未然防止、早期発見に向けての取組を行うことができた。学期ごとに二者懇談を実施し、生徒と個別で話をする機会を設けることができた。日頃から学校全体で子ども達の様子を見守った。	アンケート、二者懇談の実施はいじめの未然防止、早期発見のため今後も定期的に実施する。担任だけでなく、教科や部活、養護など教員全員で生徒と関わり、見守っていく必要がある。	
特別活動等	望ましい集団活動を通し、自己を生かす能力の育成	開校より生徒らが築き上げた伝統がコロナ禍により断絶させないように引き継ぎ発展させていく。	新型コロナウイルス感染症によって中止・縮小された生徒会活動・行事が生徒から生徒へと受け継がれていないため、その内容を補完し、新たな内容も創出しながら活動を活性化させる。	B	途絶えていた学校キャンプを衛生管理に配慮しながら交流宿泊という形で復活させた。また、ベルマークなど新たな活動も開始した。	B	新型コロナウイルス感染症の拡大防止策を実施しながら、可能な範囲で学校行事を開催することができた。今年度については、コロナ前の行事、コロナ禍で新たに取組んだ行事の両方を実施できた。	委員会活動の充実を図るために、常時活動と一時的な行事活動の取組を分け、活動内容の充実を図る。生徒の意見を学級、生徒会が集約できるように、話し合い活動の充実を図る。	
教育相談	自尊感情(自己肯定感)の育成	生徒の自己否定的な意見や小さな変化を見逃さず、生徒の不安や悩みに寄り添い、聞く体制の充実を図る。	生徒を観察し、気になることがあれば教員で連携し、未然防止、早期発見、早期対応、支援につなげる。必要であれば、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとも連携し、支援についての助言・指導を得る。	B	気になる生徒についてスクールカウンセラーと情報共有することができている。スクールカウンセラーによる授業を取り入れ、関係を築き、聞く体制の充実を図ってきたい。	B	気になる生徒についてスクールカウンセラーや学級担任と情報共有を行い、スクールカウンセラーとの面談につなげることができた。スクールカウンセラーによる研修等を実施し、対応方法について共通理解を図った。	生徒のより良い支援のため、来年度より、生徒の支援に対して専門家の意見を聞く機会を設けるために、スクールカウンセラーを入れて、教育相談部会を定期的に実施したい。	
キャリア教育・進路指導	進路実現を見据えたキャリア教育の充実	生徒が主体的に進路選択できるように、さまざまな進路の情報や体験活動を提供する。	生徒が、自分なりの将来像を実現するために、学校生活や学習活動に前向きに取り組んでいる。	B	年2回の進路説明会を実施した。進路通信を随時発行することで、生徒に最新の情報を伝えている。進路掲示板やパンフレットの置き場を3年生教室付近に変更し、手に取りやすい環境を整えている。	B	オープンスクールの情報を積極的に発信することで、多くの生徒が高校の説明会に参加した。職場体験活動を再開し、働くことの意義と社会のルールを学ぶことができた。	村外の高校のオープンスクールに参加しやすくなるために、中学校単位での学校訪問を再開する。職場体験だけでなく、村内で働く社会人、リモートで対話できるIT関連の職業など、さまざまな人と対話する機会を提供する。	
道徳教育	道徳教育の充実	各学年の道徳の授業や合同道徳で互いの意見を議論し考える授業を行う。また、ICTを活用し、多くの意見を視覚的にも共有できるようにする。	学年の枠を超え、自分の考えを出し、相手の意見も聞く姿勢をもって取り組んでいる。	A	合同道徳を中心に、授業を行うまでに複数の教員で教材研究を行った。考え、議論する授業になるような発問に加え、問い返しのキーワードを準備しておくなど、新しい取組を多く取り入れることができた。	A	道徳の研修を積極的にを行い、指導力の向上につなげることができた。合同道徳を中心に、学年の道徳においても教員同士が協力し、生徒が考え、議論するような発問や問いかえができるよう、教材研究に取り組むことができた。	研修・研究に取り組んだことで、授業作りや評価など多くのことを学び実践してきたが、複数人の教員で教材研究を行う時間を確保するのが難しいので、年度初めに教材や時間割など計画を練っておく必要がある。	
人権教育	生命の尊重と人権意識の高揚を目指した確かな人権教育の推進	人権講話や道徳を軸とし、日常生活の中での成功体験を積み重ねることで、自己肯定感を養う。	他者を思いやり、互いに協力し合っている。	B	人権講話について年間の計画通り実施できている。振り返りシートを活用しながら人権について見つめ直す機会を設けているので、続けていく。日常生活の中で褒めることをたくさん増やし自己肯定感の育成を意識している。	B	人権講話を計画通り実施できている。アンケート結果にも表れているように、各先生方の協力もあり生徒にとって人権について学ぶことができる場となり、人権が大切にされていることが伝わっている。	自己肯定感が少し低いと思われる生徒が一定数いるので、日常生活で褒める機会を設けながら、人権教育の中で違いを認め合えるような学習をする機会を設ける。	
特別支援教育	みんなで関わる特別支援教育の推進とインクルーシブ教育の充実	人権教育や道徳教育、各学習活動を通して特別支援教育について正しく理解できる学習を行う。専門機関などの連携を図り、特性や障害に応じた指導計画の作成や適切な指導を行う。	生徒間や教師間でそれぞれ偏りのない特別支援教育についての知識を共有する。専門機関と密に連携を行う。	B	各自の特性に応じた支援体制、環境づくりを全校体制で連携を取りながら進めている。また、生徒にも特別支援教育に対して理解が深まるよう折に触れ指導をおこなっている。	B	「全校体制で関わる特別支援教育」は年々充実している。今後も変わらず今の体制を取り続け、特別支援教育の充実をめざす。	毎年度、様々なタイプの支援を必要とする生徒の変化があり、一人一人の様子を見極め個人に合った体制を構築する必要がある。	
安全教育	保健安全・防災安全教育の充実	生徒が自己管理能力を身につけ、健康に生活ができるよう指導する。また、日常の健康観察により、生徒の健康状態を把握し、健康の保持増進に努める。	教員で連携し、生徒の日常の様子を把握し、授業中や休み時間の体調や様子を見るとともに、適切に対応する。気になる様子の生徒がいた際には、教員で情報共有し、共通理解を図る。	B	健康観察カードを確認し、授業中や休みに時間に生徒の様子を見ることで、生徒の状況把握に努めている。今後、個別の保健指導の充実を図りたい。	B	怪我をした際に処置方法等を理由を付けて説明し、どうすれば防止できたかを一緒に考えた。自己管理能力を身につけられるよう、個別の保健指導を充実させた。	健康観察カードが中々出ない生徒がおり、健康観察カードから生徒の様子を読み取るのが難しいことがある。健康観察カードの提出と合わせて、校内巡視を行い、生徒の健康状態の把握に努める。	
家庭・地域社会・他校種・関係機関等との連携	学校評価を活用した開かれた学校づくり	積極的な情報収集・情報発信・連携を行い、保護者・地域等から信頼される学校づくりを目指す。	前年度踏襲だけでなく、PDCAサイクルを活かした連携の充実に努める。	B	・ホームページは年々内容を充実させることができています。 ・地域連携教育では、活動部会の交流が昨年以上に活発に行われている。	B	情報発信は「信頼される学校づくり」、「地域とともにある学校づくり」に重要な役割を果たすため、本年度も積極的に進めた。学校間の交流や保護者へのアンケート等でオンラインを活用する機会が増えてきた。	生徒間の交流や保護者との関わりにおいて、対面での良さを大切にしながら、効果的なオンラインの活用を図る。	
第1学年	基本的な学校のルールを守り、集団生活の基礎を身につけさせる。	チャイムと同時に授業を開始できるように準備するなど時間を守ることや、授業開始や終了の号令を徹底し、メリハリをつける。	授業と休み時間のメリハリをつけ、学年だけではなく他の先生とも連携し指導する。	B	・春秋の校外学習や文化祭、体育大会などの行事を通して、協力する姿が見られた。 ・学級目標にあるような、協力し合い、日々成長するような集団になれるよう学級活動に取り組んでいきたい。	B	日々の生活の中で時間を守ることを意識させることにより、予鈴で授業準備を始め、チャイムと同時に全員が授業に向かう姿勢ができています。また、学年だけでなく他の先生とも連携しながら、生徒について情報共有し、指導することができた。	学校生活の中で先輩でもあり、後輩でもある、難しい時期になるので、他者との関わり方を改めて道徳や学活等を活用して指導していきたい。また、引き続き、時間を守ることを意識させたい。	
第2学年	リーダーシップの養成とキャリア教育の充実	学校生活の様々な場面で、集団の一員としての自覚や上級生としての責任を実感させる。また、職業学習や進路学習を中心に、将来についての見通しを立てる力を養う。	集団生活を円滑に過ごすために他者を尊重する態度を身につけている。また、自分の理想とする将来を実現させるための見通しを立てようとしている。	B	・学級役員が月間目標活動を始め、リーダーシップを身につけてよりよい集団を目指した活動を継続していきたい。 ・職業学習で身につけた勤労観を、進路選択に結びつけた進路指導を行ってきたい。	B	学級活動や委員会、部活動等でリーダーとして行動する機会が増え、集団全体を見渡して行動する力が身につけ始めている。また、職場体験学習や入試へ向けた進路学習では、自分事として捉え積極的に参加し学ぶ姿が見られた。	大きな目標に向かって逆算しながら計画を立て、自ら課題を見つけて解決策を模索できる力を身につけさせていきたい。また、来年度の進路選択に向けて、進路学習を引き続き充実させていきたい。	
第3学年	最高学年としての責任感の育成と進路学習の充実	最高学年として、責任を持って学校を引っ張っていく意識を持たせる。自らの将来を考え、自発的に行動する力を養う。	困っている人に寄り添い、互いに助け合おうとする姿勢を身につけている。	B	・学級において、各々の個性を理解し、声かけや行動に移すことが出来る生徒が増えてきている。 ・卒業後の進路を見据え、自らの生活を見直しより良くしようとする姿勢が見られる。	B	日々の声かけなどによって、生徒一人一人が自他の個性を理解しようとする姿勢を身につけさせることが出来た。また、自らの将来のために今何をすべきかを考え、行動しようとする姿勢も見ることができた。	卒業まで残り短い時間ではあるが、各々の進路へ向けて、自らを見直しより良く生きようとする態度を養っていく。	
学校教育の維持・向上	働き方改革の推進	教育活動の効率化を大切に、生徒の学力向上と、教職員の仕事と生活の調和を心掛けた働き方改革を進める。	勤務時間に関する制度等を積極的に活用し、昨年度の学校評価や時間外勤務時間と比べ、今年度の結果が向上している。	B	・前年度に比べ時間外勤務が月平均約2時間増えている。 ・今年度より勤務時間の割り振りや週休日の振替などの活用を始めることができた。	B	教職員の働き方改革に対する意識は高まっている。又、部活動指導等できるところから工夫・改善し、時間外勤務の削減にも取り組むことができた。	道徳指定校として研究を推進したこともあり、時間外勤務は前年度より増加した。組織としてのスクラップアンドビルド、個々としての業務の見直し等を進める必要がある。	